

第4章 連携校の取組

4.1 県内連携校の取組

4.1.1 WWL事業連携校【福島県立福島高等学校】の取組み

(教頭 細谷 弘樹)

1. 本校の概要

本校は、明治31年、福島県第三尋常中学校として創立されて以来、125年の歴史ある伝統校である。平成15年から男女共学となり、現在、募集定員280人(7学級)、全日制課程、普通科単位制の学校として、本県の普通科教育を先取実践、牽引している。

平成19年度からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、課題を解決する能力の育成や地域の復興、地域の創生を担う人材の育成を目指してきた。現在、第IV期目(令和4年度から令和8年度までの指定校)の2年目として、本校の教育目標である「世界を深く探究する高い知性と、人の痛みがわかり多様な他者と協働する豊かな人間性、自らと社会を変える変革マインドをもって、解決困難な課題に果敢に挑戦し、新たな価値や生き方、社会を創造する人間の育成」の実現を目指し、様々な取組を実践している。

2. 連携校における特色ある取組み

課題発見力養成講座

1年次のSS探究※において課題研究の手法を学ぶ7つの講座を本校教員が実施し、課題研究に向けて必要な力を育成している。※「総合的な探究の時間」にあたる本校の学校設定科目

学年ディベート大会

課題発見力養成講座の1つであるディベート講習会で学んだディベートの手法を使って、クラス対抗のチーム戦を行い、表現力や傾聴力、批判力の育成を図った。

高大連携講座

生徒は福島大学の先生方が本校で開講する20の講座から文理それぞれ2講座(計4講座)ずつ選択受講し、大学レベルの研究の話や課題研究の手法を学んだ。

全員課題研究(サイエンスリサーチ)

2年次では、生徒の興味・関心と社会課題、学術的な課題との接点を探しながら全員が研究テーマを設定し、教員や外部関係者からアドバイスを受けながら研究活動を進めていく。

海外校との共同研究

グローバルな視野と異文化への理解を深めるため、海外の高校生とオンライン会議を活用した共同研究を実施した。

日英サイエンス・ワークショップ

日本の高校生25名と英国の生徒25名による本校主

催のサイエンスフェアを実施した。フェアの期間では、福島の現状を伝え、そこから見えてくる課題についての議論や東北大学の協力のもと海外生とのワークショップを行い、科学的な研究について交流を深めた。

ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)研修

英国のUCL大学の大沼信一教授(福島高校出身)がプロジェクトリーダーを務める研修プログラムに生徒3名が参加し、将来、世界的なリーダーになるための素地を学んだ。

T-JSSF2023 タイ王国研修

本校と姉妹校協定を締結しているタイ王国の「プリンセスチュラボン サイエンスハイスクール ナコンシー タマラート校」の紹介により「Thailand-Japan Student Science Fair 2023」に生徒4名が参加し、英語で研究の成果を発表した。

グローバルサイエンス

日本にいる外国人研究者の研究紹介や生徒達によるプレゼンテーションを行い、英語による表現力の育成やグローバルな視点を持った人材育成を図った。

ウメタンS(希望者による発展講座)

理系の内容に特化したSS探究の発展講座。オンライン講座であるため、県内外からの参加校も多く、地域の理数教育の発展にも貢献している取組である。

リベラルゼミ(希望者による進路指導部主催の講座)

授業では学べないテーマについて学ぶ講座。今年度は9回実施した。

医学コースの取組

令和4年度より1,2年生を対象に「医学コース」を設定し、医師や看護師をはじめとして医療従事者を志す生徒の職業観や基礎的な素養を体験実習や医療従事者の講演会等を通して養い、将来本県で活躍できる人材を育成している。



東北大学との取組(学問論演習の実践)

東北大学の先生によるオンライン授業。今年度は16回実施する予定である。

3. 課題と展望

- ・文理横断した学際的な学びやSTEAM教育を反映させた教育課程の編成
- ・大学単位認定制度の構築

4. 1. 2 WWL 事業連携校【福島県立安積高等学校】の取組み

安積高等学校教諭 遠藤直哉

1. 安積高校の概要

創立から139年を迎える福島県内で随一の進学校である。文部科学省のスーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業に指定されており、理数系教育を特に強化している。文化活動及びスポーツ活動にも力を入れている一方で、生徒の基礎学力も非常に高く、多くの卒業生が国公立大学や有名私

立大学へ進学している。旧帝大や医学部など、難関大学への進学率も高いが、近年は東京大学などの最難関大学への合格者数が減少しており、その対策を急いでいる。令和7年度からは併設型中学校を開設予定で、6年間の一貫教育を実現するための教育カリキュラムを策定中である。

2. 連携校における特色ある取組み

SSH指定校であり、SS総合Ⅰ、SS総合Ⅱ、SSアカデミーⅠ、SSアカデミーⅡといった科目を設定し、論理的思考力、課題発見力、課題解決力の育成に取り組んでいる。海外との交流も積極的に行っており、ドイツ、フランス、タイの機関と連携し、現地高校生との生徒交流を実施している。地

域協働活動においては、地域課題をテーマにした探究活動を展開し、本校OB・OGにシニアサポーターとして協力していただいている。各分野の第一線で活躍する専門性の高い人材を招く試みは、生徒の視野を広げるだけでなく、学校と地域の連携にも繋がるものとなっている。

3. 課題と展望

生徒のレジリエンス、つまり困難な状況を乗り越える力が、以前に比べ低下していることが課題である。挫折経験が少ない生徒にとって、これは特に大きな問題である。VUCAな時代を乗り越えるためには、レジリエンスが不可欠である。そこで、本校では「開拓者の時間」というレジリエンス向上を目的とした講座を導入し、生徒の認知の歪みやABC理論を取り入れた心理学に基づく授業を通じて、多様な価値観の醸成や自己肯定感の向上を目指している。課題研究の指導はSSH事業の指定によりシステム化が進んでいるが、課題研究の深化という面ではまだまだ物足りない状況である。この深掘りする力は、単に探究活動をさせるだけでは限界があることがわかってきた。この状況を打破するために、今年度から思考力の育成に特化した授業を展開している。人間の能力の本質は抽象化力であり、生徒の能力育成のカギである。この力を身につけさせる方法として今年度1.2学年で5時間程度の時間を取って独自教材で授業を行っている。

そこで習得を目指した力は以下の4つである。

- ① 結果（具体）から原因（抽象）を探る力
- ② 目的（抽象）を意識しながら手段（具体）を考える力
- ③ 異なるもの（具体）を同じ構図の事象（抽象）として捉える力
- ④ 見えるもの（具体）の奥にある見えない事象（抽象）を見る力

また、抽象化に際して注意すべき点として以下の3つを挙げた。

- ⑤ 抽象化とは捨象を伴う作業だが、捨て去ってよいものかを吟味することは重要である。
- ⑥ 高次目的（高次の抽象）は低次目的（低次の抽象）を軽視しやすいので注意が必要である。
- ⑦ 人間は、合理化は得意だが、必ずしも合理的ではない。

次年度は、これらの内容についてテキストを再編集し、15時間程度を使って実施する計画である。授業の効果や生徒の変容については、来年度に報告したい。

4. 1. 3 WWL事業連携校【福島県立会津高等学校】の取組み

教諭 遠藤 俊太郎

1. 本校の概要

本校は、校是「好学愛校」「文武不岐」のもと、会津地区の進学指導拠点校に位置する普通科単位制の高校である。高い知性と豊かな人間性を育み、論理的思考力やコミュニケーション能力、リーダーシップを身に付けることにより、日本や世界で活躍できるグローバルリーダーとなりうる、自律的な生徒を育成することを目標としている。また、令和4年度入学生から単位制に移行し、その特長を生かした多様な学びと、大学等と連携した探究学習から得られる高度な学びの実現を目指している。

校是
好学愛校
文武不岐

生徒の希望する進路の実現のために、「高い志」「目標」を持たせる取組み、興味・関心を持たせ視野を広げる取組み、学力向上への取組みに力を入れている。令和4年度からは医学コースを導入し、医学分野への関心を高め医師としての人間性を醸成することや、医学部進学に向けた学習指導・進路指導等の取組により、将来本県で活躍できる人材の育成を目指している。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 「高い志」「目標」を持たせる取組み

現役大学生（卒業生）による講演やOB・OG講演会などを行っている。令和5年度は、サッポロビール株式会社マーケティング本部から本校男女共学1期生のOG 沖井尊子氏を招き、「丸くなるな、星になれ。」という演題で全校生対象に講演を行った。

(2) 興味・関心を持たせ、視野を広げる取組み

大学教授等による出張講義やオープンキャンパスへの参加、大学等に出向いての最先端研究実習体験などを行っている。令和5年度の大学講座においては、1・2学年対象に、全18講座に分かれて大学教授等による出張講義を実施し、より専門的な学問に触れ学ぶ面白さを体感させるとともに、大学進学への意識を高める取組みを行った。また、希望生徒対象による大学訪問など、進路実現のための資質・能力の育成を行っている。



(3) 学力向上への取組み

日々の授業の質を高める教員の授業研究に加え、長期休業中の補習や予備校講師による特別講座、個別添削指

導などを通じて、生徒の学力向上を図っている。

(4) そのほかの取組み

・総合的な探究の時間における探究活動について

総合的な探究の時間を通じて「自ら課題を見つけ、自ら解決策を模索し、1人で歩き出す生徒の育成」を目標として、全教員で指導に当たっている。1学年では、「子ども」「観光」など9つのグループに分かれ、地域課題の解決を目指すグループ探究を実施している。2学年では、希望進路と関連した会津地域の課題を生徒一人ひとりが発見し、その解決を目指す個人探究を実施している。

・医学コースプロジェクトについて

元東京大学副学長（医学博士）の武藤芳照氏や会津若松医師会長の矢吹孝志氏による講演、医学部現役学生による講演・座談会などを実施した。2年次の総合的な探究の時間とも連携し、個人で地域の医療課題解決に向けた探究活動を実施している。

・ICT活用について

令和3年度から、本県の「ICTを活用した新しい時代の教育研究開発事業に係る指導力向上開発校」として、新たな教育指導の可能性を模索している。Google Workspace等を活用した新たな教育指導プラットフォームの構築や、教職員ポータルサイト等の充実による校務の効率化を行ってきた。授業における一人1台端末の活用についても、各教科で実践事例を蓄積し、授業公開等を通じて校内外に共有する取組みを行っている。

3. 課題と展望

・学力向上に向けた指導について

大学入試における総合・学校推薦型選抜など、入試形態が多様化しており、コンピテンシーベースでの資質・能力の育成や、それに向けた指導体制の構築が求められている。総合的な探究の時間も含めて、より有効な全体指導・個別指導の在り方を模索していく必要がある。

・探究活動における外部との連携について

探究活動の成果を発表・共有する場として、校内での課題研究発表会を実施している。校外でも高校生サミット等で提言を行う生徒もいるが、一部に留まっている。現時点では、探究活動に際して大学や行政、専門機関などと連携したり、指導助言を受けたりする機会がほとんどない。課題発見能力や情報収集能力、分析能力を高める機会として、こうした外部連携を進めていきたい。

4. 1. 4 WWL事業連携校 【福島県立会津学鳳高等学校】の取組み

(副校長 星 博人)

1. 本校の概要

本校は、大正13年に若松実業女学校として創立し、今年度百周年を迎えた。平成14年に若松女子高等学校から、共学による総合学科として会津学鳳高等学校となり、平成19年に会津学鳳中学校を併設して、県内初の公立併設型中高一貫教育校となった。中高一貫教育による進学型のプログラムを総合学科の中に組み込んだ特色ある教育を展開し、今年度で17年になる。

教育目標に「国際化、情報化社会に夢拓く力の育成」を掲げ、中学校から高校までの6年間を計画的・系統的な教育課程を設定している。また、令和3年度から3期目となるスーパーサイエンスハイスクール (SSH) の指定を受け、理数教育を中心に様々な研究機関や大学などと連携して課題解決型学習を展開している。

SSH 3期目の研究開発としては、Society5.0 や高度情報化の時代の実現、そして持続可能な社会に貢献する人材の育成のため、事業テーマ「サステナビリティ」及び「Think Globally Act Locally」を掲げている。会津から世界を創造する科学者として必要な資質・能力の向上を図る取組を行い、そのために必要な中・高・大の教育プログラムの研究開発を行うことを目指している。

SSH による教育課程上の特例については、高校1年生対象に「産業社会と人間」に替えて「SSH 産業社会」、高校2・3年生対象に「総合的な探究の時間」に替えて「SSH 探究」を開設し、全員が履修して探究活動を行っている。それぞれ、地域に根差した探究活動を行う「GS (グローバル探究) コース」と、それに加えて高度な理数探究活動を行う「SS (サイエンス探究) コース」に分かれており、生徒は自らの希望によって所属コースを決定している。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 高大連携協議会 (会津大学・会津大学短期大学部)

会津大学・会津大学短期大学部と高大連携に関する協定を交わし、高大連携協議会を設置している。主な事業は、大学教員等の本校への講師派遣「スポット講義」と本校生徒が大学、短期大学の授業科目を受ける「講義聴講」である。今年度は「スポット講義」を8講座実施した。また、希望者を対象にした「講義聴講」は、高校在学中ながら講義を聴講することができ、高校の修得単位に加えることができるうえ、会津大学・会津大学短期大学部に進学した場合、その単位が大学の単位として認め

られる。これらの事業に加え、今年度は高校1年生「GS (グローバル探究) コース」課題研究の中間発表会に、会津大学短期大学部の学生16名が助言者として来校し、生徒の発表内容についてアドバイスをした。高校2年生の課題研究中間発表では、短期大学部の先生8名が講師として来校し、生徒の発表に対して助言をいただいた。

(2) 地元企業との連携をいかした課題研究

高校1年生「GS (グローバル探究) コース」では、地元会津地区の各自治体や地元企業との連携をいかして、課題研究に取り組んでいる。その他、会津地区の高校生が地域企業からの課題に対し、自分たちの考えや解決策の意見交換をくり返して解決策を見出す「高校生による会津地域活性化プロジェクトALMS」を立ち上げ、約30社の地元企業や自治体の協力を得て地域に根ざした活動をしている。今年度は、会津工業高校とザベリオ学園高校の生徒とともに、9つのテーマで活動を行い、成果を発表した。

(3) 理数教育の拠点校となる探究活動

理数系部活動「SSH 探求部」では、全国総合文化祭で4部門に出場した他、「日本学生科学賞」や「野口英世賞」などで受賞するなど全国規模の大会で活躍している。さらに、「あいづサイエンスフェア」や「小学生のための科学実験講座」を開催し、小学生に自然科学への興味関心を育てる活動など地域の理数教育の振興に尽力している。

(4) 国際性を高める事業

海外研修として台湾の高校「建国高級中学」との交流を行っている。オンラインや現地での交流をとおして、科学の国際性と化学英語の重要性を認識させ、世界で活躍できる科学技術者の資質育成を目指している。

3. 課題と展望

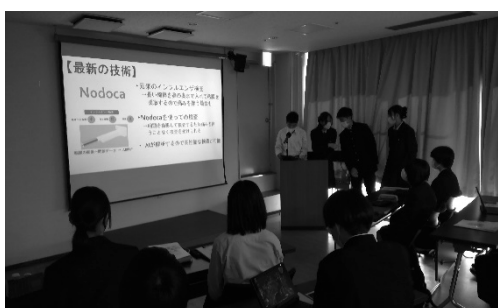
本校では、令和3年度から入学者の定員減に伴い、教員定数も年次進行で減少している。本校の特色ある事業は、SSH 事業の拡大とともに広がりを見せているが、担当者の負担軽減と働き方改革の実現のため、持続可能な事業への展開が求められている。今後は、事業の精選を行いながら、会津大学や会津大学短期大学部との連携をより深めて、メンター制などを確立することや、地域企業や自治体の協力を得ながら、生徒の探究活動を校外で推進していくなど、外部機関とより有機的な連携を図っていくことが必要である。

4. 1. 5 WWL事業連携校 【磐城高等学校】の取組み

(教頭 深谷 誠)

1. 本校の概要

本校は明治29年に開校し、平成13年度入学生より男女共学化、令和4年度入学生より単位制が導入された。校是「知性と責任」のもと、いわき地区唯一の進学指導拠点校として、文武両道を実践するとともに、高い知性と時代の変化に対応できる生きる力や知徳体の調和のとれた豊かな人間力を身に付けることにより、日本・世界で活躍できるトップリーダーの育成を目指している。単位制の特長と福島S I H事業の成果を踏まえ、多様な学びと主体的な探究学習による高度な学びの追究に加え、医学分野への関心を高める取組を実践している。



企業訪問研修

2. 連携校における特色ある取組み

福島県教育委員会より指定された「福島スーパー・イノベーション・ハイスクール（福島S I H）」において、「地域の復興・未来の創造に向けて先端的研究に啓発する人材育成プログラム」をテーマに、新たな産業の創出・集積に資する研究者や経営者・起業家等、トップリーダーとして福島イノベーション・コースト構想を牽引し、浜通り地域・日本、国際社会で活躍できる人材を育成するため、以下のような取組みを行っている

(1) 最先端分野の学習

大学等の訪問調査や講義などを通じ、社会変革や技術変革に係る社会科学・自然科学の最先端研究への理解及び関心を深め、社会貢献への高い志を持った起業家、経営者、行政官、法律家、研究者、医師、技術開発者等の人材育成を目指す。

(2) 地域理解に向けた探究活動

地域の課題・現状を考察するグループ学習や、いわきアカデミア協議会と連携した地元企業の見学、経営者やスペシャリストとの出会いと対話等を通じ、人的ネットワークの大切さや地域社会及び地域産業への理解を深

める。

(3) 高度な探究活動

浜通り地域等で進む先端研究や産業集積等に関し、ICT 機器等を活用したフィールドワークや観察実験を行い、課題解決能力・プレゼン力、ディベート力の育成及び向上を図る。



津波被災地区探究

3. 課題と展望

限られた時間の中で多忙な学校生活を送る生徒が探究的な学びを深めていくことが最大の課題である。そのため、3年間を見通した「総合的な探究の時間」を計画、実践する。具体的には、コロナ禍で途絶していた外部人材の活用等を再開するとともに、現在の生徒に必要な活動を検討し、計画的に実施する。今後は、長期休業等の時期を活用し生徒が主体的に学びを深める機会を設定したい。

また、引き続き、教職員全体が生徒の探究活動を支援する体制や組織づくりに取り組むとともに、大学進学等の進路実現への連結、各教科との相互連携の拡大を図ることも課題と考える。



地域探究発表会

4. 2 県外連携校の取組

4. 2. 2 WWL事業連携校 【宮城県仙台二華中学校・高等学校】の取組み

(主幹教諭 尾形 広道)

1. 本校の概要

本校は明治37（1904）年に私立東華女学校として創立し、その後県立の宮城県第二高等女学校と合併、昭和23（1948）年には、学制改革により宮城県第二女子高等学校と改称、数多くの有為な人材を世に送り出し、今年度で119年目を迎えます。そして、男女共学、併設型中高一貫教育校の仙台二華中学校・高等学校として大きく生まれ変わってから14年目を迎えました。

校舎は仙台市の中心地に位置し、仙台駅から徒歩15分の立地で交通の便も良く、つねに最先端の学術や文化に接することのできる環境にあります。また、敷地内には同窓会館と国際バカロレア（IB）棟もあり、充実した学習環境が整っています。創立以来の文武両道の精神と、自由で明るく親しみやすい生徒の気質、地道ながらも誠実で礼儀正しい伝統の気風は現在も受け継がれています。

2. 連携校における特色ある取組み

特色ある取り組みとしては 1) 課題研究 2) 国際交流 3) 国際バカロレア（IB）類型 があります。

1) 課題研究

「地球環境」をテーマとした探究学習をさらに追究し、学校設定教科「グローバルスタディ課題研究」において「世界の水問題」を解決するために国際的な課題研究に取り組んでいます。毎年2月には校内で課題研究発表会を行います。その他にも様々な学会やシンポジウムに積極的に参加し、研究成果を発表しています。



ふたば未来学園高等学校で行われた未来創造探究生徒研究発表会にて

2) 国際交流

今年度、高校2年次生徒は研修旅行で台湾を訪問しました。故宮博物院、九份・十分と行った観光地だけでなく、タイヤル族という原住民の村を訪問し国際理解を深めました。

「世界の水問題」に関連して、希望生徒が夏（雨季）と冬（乾季）にメコン川流域を訪問し約12日間のフィールドワークを実施しています。課題研究における現地調査が中心ですが、現地の高校との交流やホームステイも行っています。



ベトナムの
チョウタイン
第一高校との
交流の様子

また、毎年3月には高校1・2年の希望生徒をアメリカ・デラウェア州へ派遣し現地の高校生と交流を行っています。

国際交流を通して、生徒は広い視野で物事を捉えるようになり、より良い社会を作るには自分は何ができるのかを考えます。

3) 国際バカロレア（IB）類型

令和3年4月よりディプロマ・プログラム（DP）が開始され、現在3年目を迎えています。東北で唯一の公立高校DP校として県内外から多くの方が視察に訪れます。1年次の早い段階で希望生徒を募り体験授業や面談を通して選択したのち、2年次と3年次の2年間でDP取得を目指します。IB類型の中でも希望進路によって文系と理系に分かれ選択授業を受けます。授業は少人数で対話を重視して進めています。外国人の先生が英語で行う授業もあります。海外大学を含めて多様な進路に対応しています。

3. 課題と展望

併設型中高一貫教育校として、高等学校は課題研究、国際交流やIB類型といった特色を生かして魅力ある学校づくりを行う必要があります。そしてその魅力を県内外に発信することも重要です。

また、併設型の中高一貫校であるため高校から入学した生徒と一貫生徒で学習進度の違いがあります。教育課程や学級編成についても引き続き検討していく必要があります。

4. 2. 2 WWL事業連携校 【山形県立東桜学館中学校・高等学校】の取組み

研究課国際交流主任 山口和彦

1. 本校の概要

本校は、県内初の併設型中高一貫教育校として平成28年に開校しました。「高い志」「創造的知性」「豊かな人間性」を基本理念とし、次の3つを教育目標としております。①地域社会及び国際社会の発展に貢献しようとする高い志を育てる、②豊かな感性や探究心と論理的な思考力を基盤とした創造的知性を育てる、③心身ともに健やかで、郷土愛と公共の精神に富む豊かな人間性を育てる。6年間の計画的・継続的な教育により、先進的な理数教育、国際理解教育を実践し、生徒一人ひとりの個性の伸長を図るとともに、自ら学び、物事に挑戦する心を育み、グローバルな視点を持ちながら、地域社会や国際社会の発展に貢献できる力を育成しています。

平成29年にSuper Science Highschool (SSH)に指定され、令和4年度より第Ⅱ期に入り、「中高一貫教育校を核としたやまがたの未来を拓くグローバルな視点を持った科学人材の育成」のテーマのもと、課題研究「未来創造プロジェクト」の一層の充実を図り、特色ある事業にチャレンジしています。

2. 連携校における特色ある取組み

(1) 国際英語プレゼンテーション大会の開催



ユネスコスクールのネットワークを通じて得たタイ、マレーシアの連携協力校を中心に、国内外の高等学校生を招待して探究活動の成果を英語でプレゼンテーションし、質疑応答も審査対象とする大会 START [ST(udy) A(ssembly) (of) R(earch) (at) T(ouohgakkan)]を令和4年から主催しています。研究内容に応じて5つの分科会場でそれぞれに審査、表彰されます。2年目となったSTART2023は、オンラインと対面のハイブリッド形式で行い、ノンシンウィッタヤコム中等学校(タイ・来校)、モンクット王工科大学トンプリー校(タイ)、SMKA コタキナバル中等学校(マレーシア)、國立臺北科技大學附屬

桃園農工高級中等學校(台湾)の4校が海外から、国内は兵庫県立豊岡高等学校、静岡北高等学校、東海大学付属高輪台高等学校、東京都立多摩科学技術高等学校、新潟県立新発田高等学校、岩手県立一関第一高等学校、秋田県立横手高等学校、宮城県立古川黎明高等学校、福島県立安積高等学校、福島県立ふたば未来学園高等学校の他、県内からも本校以外に4校が参加しました。

(2) 英語で発表する機会の増加

今年度、早速WWLコンソーシアム構築支援事業である全国高等学校生フォーラムにも本校から参加させて頂いたように、英語で発表する機会を増やすことは本校の目標の1つです。令和5年度はこの他にも、SciUS Forum(タイ国内の16の大学、19の学校が参加しての科学、技術、研究、イノベーションに関する研究発表と協働学習の大規模なフォーラム)にも生徒4名が参加した他、21世紀の中高生による国際科学技術フォーラム(SKYSEF2023; 静岡北高等学校主催)や東海大学付属高輪台高等学校 SSH 成果発表会(International SSH Presentation Seminar 2022)、2024 グローバル・サミット”Be a Bridge”(日本と台湾の高等学校生が社会課題の解決に向けたプレゼンテーションや討論会をする交流会; 山形県教育旅行誘致協議会主催)に参加しています。

(3) 特徴的な英語教育

SSHによる学校設定科目 CLIL English I・IIを高等学校2・3年次に設定しており、科学や社会に関することを、英語を通じて学ぶ授業が設けられています(2単位)。また、株式会社アルクが行っているSherpa事業により、金谷憲先生(東京学芸大学名誉教授)をアドバイザーに迎え、ディベートを中心とした中高一貫の英語教育・東桜モデルの開発に取り組んでおり、中学3年生で校内英語ディベート大会を行い、高等学校でも複数回英語の授業でディベートを取り入れたカリキュラムを進めています。

3. 課題と展望

海外との交流は、オンラインでは時差を含めた時間設定が、対面で行うには円安の影響などを含めた予算の問題が大きな課題となっています。研修旅行の日程が4泊までという制限があり、希望者を募っての研修は保護者の負担で実施せざるを得ない状況にあります。予算的な問題を解決できるならば、より多くの海外校との交流が可能になり、規模の大きな取組みが可能になるでしょう。